

『朝鑑賞』の取り組みと成果報告

The activities and the results about morning appreciation of Pictures

武蔵野美術大学 三澤 一実

Kazumi MISAWA / Musashino Art University

1. はじめに

『朝鑑賞』という活動は筆者が所沢市立三ヶ島中学校の校長に提案し、年間を通して実施している朝の鑑賞活動である。本論文では、所沢市立三ヶ島中学校で行っている『朝鑑賞』の活動について、その活動を始めるに至った経緯と、『朝鑑賞』の研究体制及び実施状況、そして活動の成果などを報告する。

2016年度の12月に、中央教育審議会から、「幼稚園小学校中学校高等学校及び特別支援学校の指導用領の改善との方策について」（答申）が示され、学習指導要領改訂の方向性として「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の3つの柱の下に、「社会に開かれた教育課程の実現」を目標とし指導要領の改訂が進められた。特に「どのように学ぶか」においては、主体的・対話的で深い学びを実現させるアクティブラーニングにより、これまでの指導法を改善し、新しい時代に求められる資質能力を育むことが示された。

一方、教科の学習においては「各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ」が示され、それぞれの教科で育む資質能力を明確にすると共に、それらを連携させるなどして新しい時代に応じた資質能力を育むカリキュラムマネジメントの実現により、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力の涵養」「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力との育成」をしようとしている。

さて、『朝鑑賞』の取り組みでは、筆者の予想を超えて、新たな教育課程が求める上記のような資質能力の育成が学校全体で実現されつつあり、生徒の成長へと現れてきた。その様子を述べていきたい。

2. 本活動に至った経緯

三ヶ島中学校では2016年3月に初めて『旅するムサビ』¹を行った。『旅するムサビプロジェクト』と

いう活動は武蔵野美術大学の学生有志が主体的に展開する活動であり、学生作品を使った対話型鑑賞や、黒板に絵を描き朝登校した生徒を驚かせる『黒板ジャック』、児童生徒と造形活動を行うワークショップなど、小中学校や高等学校の美術や総合的な学習の授業にゲストティチャーとして参加して行う教育支援活動であり2008年から活動している。

『朝鑑賞』の取り組みをスタートさせた三ヶ島中学校長の沼田芳行は社会科の教員として経験を積み、同市内の美原中学校で教頭として勤務していた2012年に『旅するムサビ』を経験している。その経緯もあり子どもたちの豊かな心の育成には芸術は欠かせないと考え、芸術プログラムを学校運営の柱の一つにしていきたいと考えていた。

そして三ヶ島中学校に校長として赴任し、2015年の秋に『旅するムサビ』を行いたいと相談され2016年1月に『黒板ジャック』と対話型鑑賞を行うこととなった。その際、中学校の近くにある埼玉県立芸術総合高校の生徒と協働でプログラムを運営していくことにした。協働を持ちかけた理由は、『旅するムサビ』は異校種間交流鑑賞プログラムなので地元の高校生も巻き込みたかった点と、高校生にとっても地域における活動を促す点でよい機会になると考えた。

『旅するムサビ』の鑑賞を実施した印象では、三ヶ島中学校の生徒の実態は明るく元気が良く挨拶も大きな声でできるが、じっくり物事を考え言葉にしていく力が弱い。また、発言する生徒に限られ、生徒同士のノリで対話をするような傾向が強いと感じた。その様子を校長に話したところ、所沢市内でも学力が低く、全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査、及び、所沢市ステップアップ調査の3つの学力調査から、三ヶ島中学校の生徒は特に「考える力」と「書く力」に弱点があり、どうにかそれらの学力を上げたいと相談された。

話し合いの中で筆者は二つの事例と一つのエピソードを紹介し三ヶ島中学校が抱えている学力向上

の方策として鑑賞活動が有効だと提案した。

一つ目は、1998年にDIC川村記念美術館で行われた『なぜこれがアートなの』という展覧会である。この展覧会は、日本にMOMAで行われている対話型鑑賞(VTC)²の手法を紹介する展覧会でもあった。筆者は展覧会関連企画でアメリア・アレナス³の講演を聴く機会があり、そこでアレナスより、ニューヨークとメキシコで行われた学力に関する実験の成果を聞き、その内容を校長に紹介した。それは週に1回1時間、1年間継続しVTCの手法で鑑賞をしたらテストの得点が伸びたという観察結果であった。VTCにより言語の獲得が行われ、その結果物事の理解力が向上したという報告であった。

二つ目の事例は埼玉県加須市立加須小学校で行われていた「加須まちかど美術館」⁴の実践研究である。この研究に筆者も指導助言に関わりその様子を観察していたが、子どもの作品を街中に展示し、更に展示された作品を児童がギャラリートークして歩くというものであった。校長が談話の中で、取り組みの成果として1年ごとに全国学力調査のB問題に関して伸びが認められ、2年間で+7ポイントの上昇があったと話された。

三つ目は『旅するムサビ』での出来事である。所沢市立北小学校で、朝に『黒板ジャック』をし、そして1時間目に対話型鑑賞をしたクラス担任が、「2時間目が算数だったんですが、みんな凄く集中して一言もしゃべらないで取り組んでいたんです。こんなの初めて」と語ったエピソードである。そのクラスは活発な児童が多く、日常的に静かに集中して授業に臨むことがあまりないようだ。

沼田校長から学力向上の相談を受けた際に、この三つの出来事が脳裏に浮かび、鑑賞活動を通して学力が上がるのではないかと考えた。そこで、年間を通して継続的に鑑賞活動を行うために、実現可能な時間として週に1回朝読書に代えて『朝鑑賞』を行う提案を試みた。そして、「週に1回『朝鑑賞』を行えば学力が向上する」という仮説を立てて検証を始めたのである。

3. 『朝鑑賞』のシステム

三ヶ島中学校では平成28年度から『朝鑑賞』の取り組みを実施することとなり、所沢市の「学び創造プラン」の研究指定を受け、校内研修で『朝鑑賞』

の取り組みを位置付け、研修部が中心となり進めていくこととなった。

『朝鑑賞』を進めるに当たって、まずは4月21日に校内研修として、筆者が対話型鑑賞の意義と手法について講義を行った。内容は造形批評のプロセスを話し、実際に萬鉄五郎の「裸体美人」の画像を使って鑑賞を行った⁵。教員一人一人の作品に対する気づきや、印象、描かれている事実などを拾い上げ、おおよそ意見が出終わった頃に、制作年、制作時の作者の年齢、制作過程で事実として分かっていることなど、作品及び作者に関する最小限の情報を提供し、更に考えを深め、発言してもらうという内容で、一作品に約50分かけてじっくりと鑑賞をした。教員の感想であるが「鑑賞が楽しかった」「対話の機能に気づいた」など肯定的な意見が多かった。しかし、この時点で筆者は気づいていなかったが、美術科以外の教員に、鑑賞の仕方を伝えることは思いの外難しいという課題が存在していた。この内容については後述する。

『朝鑑賞』は5月から始まった。使用する作品は



写真上 机を教室の後ろに寄せて鑑賞。
(生徒が準備しておく)

写真下 各自席についての鑑賞。

武蔵野美術大学の学生作品と、埼玉県立芸術総合高校の生徒作品であり、写真作品から油絵、日本画、版画、ポスターとバラエティーに富んでいる。三ヶ島中学校には空き教室を改造したギャラリーがある。そこにイーゼルを持ち込み『朝鑑賞』で使用する作品を飾った。

『朝鑑賞』を行うファシリテーターは学級担任や学年所属の教員である。金曜日の朝、ファシリテーターを担当する教員は朝の職員打ち合わせ後にギャラリーに立ち寄り鑑賞する作品を持って教室に向かう。教室では生徒が鑑賞の準備をして待っている。あるクラスは机をすべて後ろに寄せて、教卓を中心に生徒が扇形に集まり床に腰をおろして作品を鑑賞する隊形で待っていたり、あるクラスは通常の授業のように各自席について教員が持参する作品を見て鑑賞を述べたりする。10分の『朝鑑賞』が終わると、教員は鑑賞に使った作品をギャラリーに返却し1時間目の授業準備に向かう。

ギャラリーにはホワイトボードが用意され、そこには各クラスが『朝鑑賞』に使用する作品のローテーション表が書かれている。三ヶ島中学校では全校で12クラスあり、全教室で鑑賞を行うため12作品をローテーションで回していく。12作品あれば12週実施できるのである。12週で作品が一巡すると、新しい学生作品と入れ替えるというシステムで実施している。また、毎週『朝鑑賞』を行う金曜日の1時間目は研修部会が開かれ、各学年の『朝鑑賞』の様子などが話し合われ、問題点や今後の進め方などについて討議を重ねている。

4. 校内研修の実施

平成28年8月25日、夏季休業中に校内研修が行われ、5月に開始した『朝鑑賞』について約2ヶ月を経過した時点での振り返りを行った。筆者はこの研修会で、それまでに浮かび上がってきた問題点を教員が自ら問題解決が図られるように、ワールドカフェ方式で教員相互に意見を出し合いながら研修を進めた。議論した内容は、三ヶ島中学校の生徒像を把握し、そこからどのような課題が見られるか、それを『朝鑑賞』でどのように改善していくかというもので、『朝鑑賞』の必要性を強く自覚してもらうものであった。そして研修の終盤には進め方で困っていることなどの質問を受けアドバイスを行った。

研修に先立ち、研修部でとったアンケート「朝鑑賞について、思っていること・感じていることなど」では以下の様な教員の声が上がっていた。

- ・ 作品を知らないといけない。→生徒から発言が出なかったときに引き出すためには作品を知る必要があると思うから。
- ・ 4クラス同じ作品をやるとクラスごとの違いもわかる。また、作品の研究の時間がなくてもできる。
- ・ 作品を見た感想、思ったことを発言することはできている。
- ・ 周囲で話し合ったり、まとめたりする場面はあまり作っていないので、教師側の課題かと思う。
- ・ 様々な感じ方や良さなどを認めていく雰囲気は各学級できている。
- ・ 作品を深めていくことが今後の生徒の課題である。生徒も慣れてきたのか、少し飽きている雰囲気もある。
- ・ 生徒たちのアンケートを見ていると「毎週金曜日の朝は美術館に来ているみたいだ」「色々な意見が聞けて良かった」など前向きな意見が多く、よかった。
- ・ 一方でいつも同じ人が発言している傾向があるので少しずつ意見を言える人が増えるとよいと思う。
- ・ だんだん、生徒たちに「飽き」が感じられる。毎週でなく、隔週のほうがよい。
- ・ 学期始めや末、行事など忙しい時期はやらないほうがよい。
- ・ 少しずつ生徒の発言が増え、積極的になってきた。
- ・ 終わり方にいつも「これでいいのかな」と不安を感じてしまう。
- ・ 最初の鑑賞では、進め方もわからず苦痛に感じた。しかし、回を重ねるごとに生徒が意見を出し合い、それに対し納得したり自分の考えが変容していく様子が見受けられた。最初は単語（きれい等）しか話せなかった生徒が絵の中から感じるストーリーを表現していく姿は嬉しかった。自分の考えを素直に表現できるクラスにしていきたい。
- ・ 地道に活動になると思うが、ぜひ先生方が面白がって継続していけるとよい。
- ・ 生徒と教員という対話はだいぶできていると思うので、今後は生徒同士の対話を広げていけるようになると思う。
- ・ 自分にセンスが（多分）ないので生徒と一緒に悩むことができない。

- ・作品を見て感じたことや思ったことを言葉にするということはふだんの教科の学習にはなかなかない場面だと思う。

このアンケートでは、2ヶ月間取り組んできた専門外の鑑賞という活動に対し、教員が手探りで模索している様子が感じられる。

アンケートにより研修前にこのような状況が把握できていたので、初回の4月に行った研修のような講義スタイルの研修では無く、教師自ら主体的に問題解決を図る方法、そして対話の力を感じ取ることができる方法で研修を進めた。

そして、研修後に研修部では今回の研修内容についてのアンケートを取り、①三ヶ島中の生徒の課題、②課題を解決していくための方策、③感想、について記述してもらい、研修の成果を確認した。アンケートの回答は次のようなものである。

①では学習に向かう力・人間性としてとして以下の様な、進んで学ぼうとする意欲や向上心の不足、そして地域性が書かれていた。

- ・自ら新しいことにチャレンジしない。
- ・深く考えないので物を知りたくならないのか、変化を求めないので学ばないのか。
- ・自分の意見を主張できない。
- ・教員の敷いたレールに乗って活動することは得意であるが（素直）自らの考えを持って行動することが課題。
- ・潜在的な意識の中に他者を排除するということが刷り込まれている（保守的）違いをよさだと感じられない。現状維持があたりまえでよい。
- ・周囲に流されやすく。それで自分の意見をはっきりと言えない。

②については生徒の主体的学習活動の充実に関する以下の様な記述が見られた。

- ・生徒も教師も考える習慣づくり。
- ・授業でなるべく自分の言葉で説明させる場面を増やす。
- ・外に出る機会、または、地元の方でも外部講師を招き、いろいろな人の価値観、その土地の常識にふれる、体験させる。
- ・学級 自分と違う考えでも他者の考え、意見を受け入れられる機会を整える →提案、実践。
- ・他者の考えを認め合える学年集団にする。
- ・アクティブラーニングを取り入れた授業を行い、対話的な学びを増やして行きたい。まずは生徒を

変容させるよりも、自分の授業を見直すことから始めていきたい。

- ・三ヶ島集団、共同体を壊す他者の役割として教師が関わる。
 - ・教師はふだんの生活に気を配り、評価していくこと。ほめるだけではなく評価。これにより判断基準に自信が持てるようになるのではないか。
- ③感想としては次のようなものがあつた。
- ・『朝鑑賞』は自分の感性の貧弱さを痛感し、毎週試練のように感じていました。子供同士の対話をつなげるヒントをいただいたので、2学期以後にやってみたいと思います。学年末に何かをつかめるといいです。
 - ・教師自身の力も必要になりますが、やはり、ゴールがないと子どもたちも不安です。ゴールがなくもいいと思える子が今後増えてきて来ればよいのですが。
 - ・自分が「飽きて」というか、行きづまっていたので、今日の研修で刺激やヒントをいただきました。
 - ・私たち教師にこそ、アクティブラーニング的な学習が必要である。
 - ・アクティブラーニングを含めて力量を高めないといけないと思うとこわいです。
 - ・「おもしろい」という言葉が価値観を壊すために使えるということが勉強になりました。勉強不足過ぎて、もっと学びなおさないといけないと感じた。学校という箱の中にいるだけでは三ヶ島中の生徒と同じで考え方が保守的になってしまう。いろいろな人の意見が聞ける場に進んで出て行かないといけない。
 - ・子どもたちと同じような感覚を味わえた気がします。自分の意見を発表するのは好きな方ですが、どうしても他の先生の表情が気になりましたし、自分から発言することは少なかったです。どんな発言でも、相手を認めること関心を持つことの大切さがわかったので今後活かしていきたいと思いました。
 - ・教師に物事を深く考える時間が欲しいと思いました。
 - ・自分自身が対話的な学びが苦手で、こういう研修には抵抗があつたのですが、ワールドカフェでの話し合い活動はプレッシャーが少なく、こちらも楽しく研修することが出来ました。
- 先に、美術科以外の教員に、作品鑑賞の深め方を伝えることは思いの外難しいと述べたが、その原因

が研修でのカウンセリングを通して見えてきた。その一つに教師自身が作品をどう鑑賞してよいか分からないという苦手意識と不安感がある。

鑑賞を進める上で、色彩や形などの造形的な視点から作品のイメージを膨らませることに慣れていない苦手意識と、教師は到達点（答え）を知っていないと生徒を間違った方向に導くのではないかと不安である。

4月の研修時には、色彩や形などの造形的な視点から鑑賞を深めていくという点について分かりやすく演習を入れながら話したのであるが、美術に対する苦手意識という障壁は思いのほか高く高いことに夏の研修で気づかされた。そして2点目の、自由な見方で発言をさせる事への不安については、日頃から知識をどのように伝えるか、習得させるかという授業に慣れている教師にとって、生徒から答えられない質問が出たらどうしようという不安がつきまわっている。生徒からの質問が教師の苦手意識を露見させるような内容であれば不安は恐怖になると想像ができる。そのような「解」を必要とする傾向は、臨機応変に柔軟な対応を苦手とする教員ほど強いと感じた。

そこで、先の研修では1つの提案をした。それは、この『朝鑑賞』は美術の授業ではないので、評価も不要であり、先生の感じたままに自由な手法で鑑賞をしてもらいたいと伝え、例えば理解に苦しむ作品であれば、教師から「この作品は、私にはどう見てよいか分からないから、皆さんならどう見るか教えてもらえる？」という質問も有効だろうし、「身体を使って感想を伝えて」とか「どんな題名をつける？」など、必ずしも形や色彩など美術につなげる必要はなく、自身の担当する教科と関連づけるなどしてみたらどうでしょうという話しをした。

夏の研修では、事後のアンケートにもあるように、ワールドカフェ方式を使って教師自身が対話をし、問題解決を図る手法を用いたため、学びにおいて対話の生成は重要であることと、カウンセリングによって、『朝鑑賞』に向き合う教師の姿勢も変化したのでは無いかと考えている。

5.1 学期の『朝鑑賞』に対する生徒の感想

『朝鑑賞』を始めて3ヶ月経過し、生徒はどのようにこの活動を捉えていたかアンケートから見てみ

たい。

アンケートでは『朝鑑賞』を「楽しい」とか「できるようになった」など活動を肯定的に捉えている生徒が多い中、「答えが無いのでつまらない」「メリットが理解出来ない」など否定的に捉える生徒もいる。それぞれ特徴的な意見を取り上げてみる。

(1) 肯定的な意見としては以下の様な意見がある。

①鑑賞そのものの活動を楽しんでいる意見

- ・美術館に行っているみたいで楽しい（1年）
- ・作者がどんな気持ちで作品を描いたかを考えると、面白いと思った（2年）
- ・毎週「どんな絵がくるんだろう」と楽しみにしていました。中には暗いものもあつたり、何を表しているのかは完全には分からないけど、自分たちで想像するのは楽しかった（3年）

②物事の見方などの、見ることの広がりについての意見

- ・人それぞれ座っている位置によって見えるものが違うのだなと思った。男と女でも感じ方が違う時があった（1年）
- ・『朝鑑賞』を通して、物を見るときに細かいところまで見るようになった（1年）
- ・自分の考えていたことが他の人の意見などを聞いて違うものに見えたりしたことがあった（1年）
- ・その絵に対して様々な意見を出し、自分の意見とは違う見方の意見や考えを知ることができてよかった（3年）

③物事のとらえ方など考え方の広がりについての意見

- ・『朝鑑賞』は自分の考えを持ち相手の考えを聞き、考えを深めていくためにあるのだなと思った（1年）
- ・『朝鑑賞』は大事だと思う。理由は『朝鑑賞』することで自分のことを分かってもらえると思うから（2年）
- ・初めは「本当に必要があるのか？」と思っていたが、色々な事が考えられるようになったと思う（2年）

④学習意欲、成果などに関する意見

- ・『朝鑑賞』で考える力が伸びてきた気がする（1年）
- ・最初は意見が言えなかったが、だんだん言えるようになってきた（1年）
- ・『朝鑑賞』があるから、皆も授業中などで発表しやすくなったと思う（2年）
- ・先生と交流ができて良かったと思う（2年）
- ・発想力が高まったと思いました（3年）

- ・授業とは違って、答えがないから意見がだしやすい。それに手を挙げたりするわけじゃないし、みんなで床に座って自由に話せるから話しやすい（3年）
- ・本を読むこととは違う意味で頭を使うからいいと思う（3年）

(2) 否定的または不安などの意見は以下の様なものがある

①主に運営の仕方などに関するもの

- ・もう少し時間がほしい→しゃべっていると時間があつという間に終わるから（1年）
- ・作品を見て思ったことや感じたことを指名された時しか言うことが出来ず、「意見がある人は？」という当て方になると、自分の思ったことに自信が持てなくなり、発言することが出来ないでいる（1年）
- ・もう少し興味を持ってそうな絵を用意してほしい（2年）
- ・作品に「正解」はないけど、「正解」があるのではないかと思ってしまう（1年）
- ・もっと分かりやすい絵がいい（3年）
- ・積極的に参加していればいいけれど、ぼーっとしているだけの人には意味がないと思う（3年）
- ・朝読書よりはいいが、全員意見が言えないのはよくないと思う（3年）

②活動そのものに対するもの

- ・朝読書のほうがいい（2年）
- ・つままない、ねむい、わかんない（2年）
- ・『朝鑑賞』にどんなメリットがあるのか理解できなかった（2年）
- ・答えがないので、つままないと思っている（3年）
- ・確かに考える力をつくかもしれないけど、読書の方がもっと学力は上がると思いました（3年）

③その他

- ・自分の考えを発表できるようにしたい（1年）
- ・自分では意見を持って友達と話しているいろいろ感じるが、みんなの前で意見を言うことがない（2年）
- ・自分の作品を見て自分が感じたこととかを発表することができなかったのが反省点です（3年）
- ・題名が毎回気になる（3年）

否定的な意見の多くは、『朝鑑賞』のやり方についての意見で有り、教師のスキルアップに伴い解消される部分が多いと考えられる。

6. 2017年度、生徒に現れた成果

2017年度は職員の移動もあり、4月から新たな体制で臨んでいる。三ヶ島中に新たに着任した教師は、『朝鑑賞』の取り組みを抵抗なく受け入れて順調に展開しているという報告を受けている。

ここでは『朝鑑賞』に取り組み始めて約1年経過した生徒の変容を量的変化と質的变化から述べる。

まずは量的な変化であるが、所沢市で行った平成29年度第1回ステップアップ調査の分析から国語の

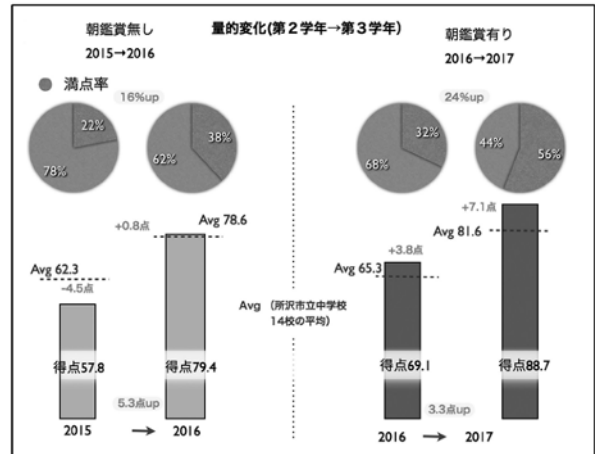


図1

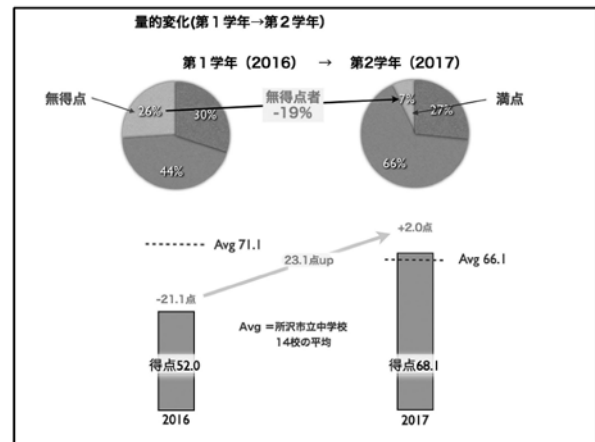


図2

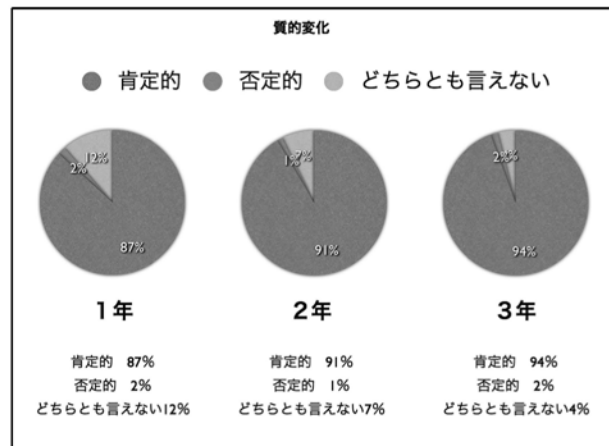


図3

文書を書く力において図1のような結果が出てきた。

2016年度の3年生に比べ、『朝鑑賞』を実施してきた2017年度の3年生は、2年次と比較して平均点では所沢平均を7.1点上回る成果を出し、2年次に比べ平均点が3.3点伸びている。また満点率が『朝鑑賞』をしなかった2016年度3年生に比べ16%から24パーセントに向上している。

2017年度2年生においては一年次と比較して平均点で+23.1点の伸びが見られた。(図2)

質的变化としては三ヶ島中学校で実施した『朝鑑賞』のアンケート自由記述欄の記述を、『朝鑑賞』について「よいと思う」とか「楽しい」などの肯定的と読める言葉が入っている記述と、「やる必要が無い」とか「読書の方がよい」など、活動そのものに意味を感じていない否定的な言葉が入っている記述、そしてどちらとも判断つかない文章の3つに分けてみた。肯定的に受け止めている生徒が学年を経るに従って増えているという状況が見られた。(図3)

主な生徒の感想は以下の様なものである。

(1) 1年生112名の回答から

①肯定的な意見として(全体の87%)

- ・いろいろな絵を見て、その絵がなぜ描かれたのか、などを考えながら見ているのが楽しかった。
- ・私は最初のころは、『朝鑑賞』はなんでやるのかわからなかったけど、『朝鑑賞』をやることで、自分の創造力などが鍛えられることがわかりました。
- ・普段、絵についてあまり深く考えたことはなかったけど、よく見れば、一つ一つの絵に色々な形や色、動きなどが見えてきてすごく楽しかった。
- ・『朝鑑賞』を通して、題名や作者がわからない中、友達と意見を述べたり、自分の考えをたくさん発表できる良い機会だと思います。

②否定的な意見として(全体の2%)

- ・『朝鑑賞』は、自分は遊びだと思っています。

③どちらとも言えない意見として(全体の12%)

- ・『朝鑑賞』に対して、自分の意見を具体的に持つことはできましたが、周りの友達と意見を出し合って、その多様性を学んだりまではできなかった。
- ・『朝鑑賞』をするとどんなことが身につくのか。取り組んではいるが、まだ形や色、動き、方向などのいろいろな特徴をつかむことができない。

(2) 2年生82名の回答から

①肯定的な意見として(全体の91%)

- ・いろいろな絵や描き方のものがあるといいと思います。朝からみんなで一つの絵について話し合うことで心が穏やかになり、良い気持ちでスタートできるのでとても良いと思います。
- ・自分の感じたことなどをみんなで共有することはすごくいいことだと思った。みんなで共有することで相手の考えと自分の考えが何が違うかを考えられるので、これからも続けていくといいと思います。
- ・『朝鑑賞』で、美術に興味を持つことができるようになったのと、これを行うことで想像力が増した気がします。

②否定的な意見として(全体の1%)

省略

③どちらとも言えない意見として(全体の7%)

省略

(3) 3年生124名の回答から

①肯定的な意見として(全体の94%)

- ・絵を見て、思考ができるようになった。その絵に描かれてある風景、感情など気持ちを読み取り、自分の意見を考えやすくなった。少しずつ興味を持ってきている気がする。
- ・自分の文章力や話す力がついた気がする。
- ・『朝鑑賞』をすると、頭の中が働く。
- ・『朝鑑賞』でものの見方が変わった。
- ・『朝鑑賞』で、独特な絵だったりよくわからない絵がたくさんあって面白かった。

④否定的な意見として(全体の2%)

- ・読書のほうが良い。
- ・これで本当に何かが伸びているのかわからない。

⑤どちらとも言えない意見として(全体の4%)

- ・今まで見たことのないたくさんの絵を見て感想を言うことは難しかった。
- ・他の学習や活動に生かす方法がわからない。

7. 分析と考察

これまでの取り組みと成果について(1)教師の変容、(2)生徒の変容、(3)教師と生徒の関係から考察を

深めていく。

(1) 教師の変容

教師の変容では直接聞き取りをした際に次のような回答があった。「今まで自分があまりにも喋りすぎていた事に気づいた」「生徒一人一人の様子がより理解でき学級経営が変わった」「授業の仕方が変わった」等である。また、『朝鑑賞』をという職員間で共通の話題ができたことで教師同士のコミュニケーションが増えて来たという報告もある。以上のことから、教師も『朝鑑賞』により生徒や職員間に個が開かれていく（開かれた自己）姿が見られる様になってきたと言える。

(2) 生徒の変容

生徒の変容は、授業での挙手が増えたり、話し合い活動や、生徒の主体性に変化が見られたりするという報告があった。アンケートの様子からも、『朝鑑賞』を肯定的に捉えている生徒が多く、自ら問題について考えようとする「学びに向かう人間性」や、自己理解と共に他者の存在に気づき、理解を深めていく様子を感じられる。また、その様な中で、美術の能力も高まっていく様子を感じられる。学力に関しては国語の書く力の向上に大きな成果を見る事ができるが、これは鑑賞活動を通して作品に対するイメージ持つことができることと大きな関連が考えられる。曖昧なイメージを言葉にして伝えようと思える過程が国語の書く力と結びつくと考えても妥当であろう。

(3) 生徒と教員の関係性

鑑賞を通して生徒理解が進むと同時に、教師が生徒を信頼して生徒の自主的な学習活動の場を増やしたり、以前より多く取り入れたりしている。特に「先生と交流ができて良かったと思う」という生徒の感想が、『朝鑑賞』が生徒と教師との距離を縮める活動にもなっていると考えられる。美術作品の鑑賞という活動において、働かせている感性は、他者

と比較できない価値の自立的平等性という性質を持ち、そのことにより、教師と生徒という社会的な立場を越えて、お互いを一人の人間として捉え直すことに繋がっていると言えるのではないか。

8. まとめと今後の課題

本研究において今後の課題は、『朝鑑賞』の成果についての分析、考察の充実である。量的な成果については、『朝鑑賞』が成果にどのように関係しているか更に一步踏み込んだ分析が求められる。これに関しては三ヶ島中学校の研修部と共同で今後研究を深めていかななくてはならない。また同様に質的な変化についても観察を続ける必要がある。これらの成果をより客観的に分析するためには、まずは複数校での実験データが必要である。幸いなことに10月から坂戸市立桜中学校で『朝鑑賞』の取り組みをスタートさせた。さらには何校か取り組む動きが出てきている。それら、複数の学校での成果が上がってくることにより、重層的な分析ができると考えており今後の研究としたい。

本研究については三ヶ島中学校沼田芳行校長を始め研修部ほか多くの先生の協力をいただいた。ここで協力いただいたすべての方々へ感謝申し上げる。

注

- 1 武蔵野美術大学の学生が、自身の作品を持参し小中学校や高校などで鑑賞活動などの授業を展開する活動。2017年教育支援活動としてグッドデザイン賞を受賞。
- 2 視覚を用いて考えるためのカリキュラム (The Visual Thinking Curriculum)
- 3 アメリア・アレナス、1984年から96年にニューヨーク近代美術館の教育プログラムを担当しVTCの開発に関わる。
- 4 加須小学校が平成18年から平成20年にかけて「豊かに表現し響き合う図画工作科の授業の創造」をテーマに研究し、平成19年からまちかど美術館に取り組んでいる。
- 5 三澤一実、2015、「造形批評力獲得のためのプログラム開発」、日本美術教育研究論集 2015